
世界中の何よりも、キミ。

桜吹 類

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界中の何よりも、キミ。

【Nコード】

N2591V

【作者名】

桜吹 類

【あらすじ】

高校1年生になる直前の春休み、桜は新しい街に引っ越してきた。彼女が此処に来たのは、心の中の疑問の答えを探すため。

あの日から渦巻く、この気持ちは一体何なのだろう…。
恋愛に疎い恋愛初心者の少女と、容姿端麗なモテモテ少年の不器用な恋物語。

01 春休み

桜side

高校1年生になる直前の春休み。

「今日から此処に住むんだねー」

私、^{なほなほ}榎崎桜はこの春から両親と一緒にアパートに住むことになった。

理由はというと、お父さんとお母さんの”喫茶店を開く”という夢がめでたく叶い、仕事場が少しでも近いようにと此処を選んだから。

「アパートだから狭く感じる？ 無理しなくても、今まで通り桜はおばあちゃんと一緒に住んでも良かったけど…」

「ううん、私此処がいい！」

両親は開店準備のために半年くらい前から此処に住んでいるので、部屋はきちんと片付いていた。

一緒に住んでいたおばあちゃんは、私が両親と一緒に行きたいと言つと快く承諾してくれ、別の親戚と住むことになった。

「まあ、また家族一緒に住めるからいいな」

「へへ」

本当は、わざわざ県を越えてまで此処に住む必要はなかったのかもしれない。

県を越える、と言っても此処の町と前住んでいた場所は隣の町に隣町の関係だし。

……でも、会いたい人がいるから。

色恋沙汰って思われるかもしれない。

ただ私は、恋愛に疎いからこの気持ちが一休何なのか知りたいだ

け。

実をいうと、その人に会えるかどうか、微塵も分からない。今の街に住んでるかとか、どの高校に通ってるかとか。

全く分からないけど、それでも小さな小さな奇跡を信じて、此処に来た。

顔と名字しか分からない、あの人に会いに。

02 高校生活の始まり

桜side

入学式は昨日終わり、いよいよ高校生活が始まった。

教室の中や、廊下はやっぱり知らない人たちばかりで緊張してしまふ。

「ねえ、名前は？」

席に座ってぼうつとしていたら突然後ろから肩を叩かれ、驚いた。振り向いて後ろの席を見ると、綺麗なストレートの髪を2つくりにした、ぱっちり二重の可愛い女の子が私を見ていて、慌てて返事を返した。

「あ…榎崎桜ですっ」

「桜ちゃんか…。よろしく！ あたし、西岡千里。千里って呼んであ、あとタメでもいい？」

「うんっ。よ、よろしく…千里っ」

そう言つと、千里は可笑しそうに笑つた。

千里が話しかけてくれたお陰で、少し緊張がほぐれた。

「実は私、隣の県から来たから知り合いが全然いなくて…話しかけてくれてありがとう、千里」

私が少し照れながら言つと、千里は目を丸くした。

「え、そうなの！？ すごいっ。そっかー隣の県からかあ」

「…え、お前隣の県から来たの？」

後ろから声が聞こえ、振り返るといかにも明るそうな男子が私を見ていた。

ちよつとビックリした私は、おずおず頷いた。

「うん、そう…」

「へっえー！ ………………」

「…？ な、何か付いてるかな？？」

その男子は黙ってじつと私の顔を見るから、なんだか恥ずかしい。
…だつてかつこいいていうか、男子にとっては失礼だろうけど可
愛い人だし…。

「あ！ 分かつたつ榎崎さん!!」

「え、ええ？ 榎崎ですが…」

思い出したように、先ほどよりもぱつと明るい表情をした男子は
私に言った。

「剣道してたよな！ 強かつたから覚えてた。あ、俺、藤野恭汰
よろしくっ」

…藤野??

胸の奥が、ドキツとした。

そんなことを知る由もなく、藤野くんは話し続ける。

「榎崎さんの後ろの人は名前なんてゆーの？」

「西岡千里。よろしくっていうか…久しぶり？」

「、、、、あつ！ 千里かつ久しぶりー！ 小学校卒業以来だなー！」

2人の会話の傍ら、私の胸は何故かドキドキが止まらない。思わ
ず病気かなと思ってしまう。

…藤野…。

私がかいいたいと思っっている人の名字のはずなんだ……。

「覚えててくれたんだあ。懐かしーね！ ……桜？」

「あつうん？」

「ぼーっとしてるから、どうしたのかなーって。」

「何も無いよ大丈夫っ！」

早く小さくならないかな、私の煩いくらいの鼓動。

まだ緊張してるのかな…。

しばらくして、だんだんと治まっていった心臓の鼓動に安心しな

がら、私達はその後も授業が始まるまで喋りつづけた。

昼休み。

今日1日ですごく仲良くなった私と千里は、喋りながら校舎の中を歩いていた。

「それにしても桜、剣道してたんだよね？ 部活はやっぱり剣道？」

千里の問いに、私は頭を振った。

「あー…、ううん。私、部活はしない予定なんだ」

「え、そうなの？ 此処の高校、剣道結構強いつて話なのに…」

私の答えは意外だったようで、千里は驚いていた。

「うちは両親が共働きで、忙しいんだ。炊事とかしなくちゃいけないかもだし…」

「そっかー…」

千里が残念そうに言った後、今度は私が訊き返してみた。

「千里は？ 部活何入るの？」

「あたし？ テニスだよー 一応中学でも部活してたから、高校もって」

「そうなんだ〜」

「うん。…あ、桜コメン、トイレ行ってきていい？」

「あ、いいよ。此処で待ってるね」

私は頷くと、少し壁にもたれて窓の外を見ながら千里を待った。

そして、あの日のことを思い出していた。

中学2年の時の夏。

県でなんとか勝ち残った私達の中学は、地方大会に出場していた。流石地方大会か、どの中学も強かったのを覚えている。

試合で残念ながら負けてしまった私はユニホームに着替え、自分

の中学を応援していた。

「…お茶買ってくるね」

喉が渴いた私は小銭を持って立ち上がり、部活仲間にそう言っていると自販機を探しに行った。

03 あの夏の日

自販機を見つけると、先客がいたので私は待つことにした。

先客はユニホームからして、どうやら隣の県の中学の男子のようだった。

彼は寒がりなのか、落ち着いた藍色の、その中学の体操服の上着らしきものを羽織っていた。

何気に彼の顔を見ると、少し頬が赤い……気がした。

「……」

なんだか、息遣いがしんどそうだった。それに気が付けば、いつの間にか勝手に口が動いていた。

「……大丈夫ですか？」

彼の少し潤んだ目が、ゆっくりと私の顔を見た。

その時、

目の前の人が熱だったら大変なのに、私は大人っぽい人だなと思ってしまうんだ。

「うん……？」

本人は私が訊いている質問の意味がよくわからないのか、首をかしげた。

「熱、じゃないですか？」

「……いつも通りですよ。別に、」

そう言っただけは少しかがんで、買ったミネラルウォーターを自販機から取り出した。

「そうですか……」

彼はお釣りを取った後、すれ違い際にじゃあ、と言ってそのまま歩いていく。……………だけど。

すれ違い際に偶然、微かに触れた彼の手が、とても熱かった。

私は微かに触れたその手をつかんだ。

振り返った彼の顔を近くで見ると、やはり目は潤んでいて、手は熱い。

「…え…？」

彼が驚いて私を見ている中、空いている片方の手を上げて、その手で彼の髪をかき分けて額に当てた。じんわりと、額の熱が手の平に伝わる。

「微熱かなあ…」

確か、私はそんなことを呟いたような気がする。

そのあと彼の手を引いて、すぐそばの階段に彼と腰かけた。

「…えっと…何歳ですか？ 解熱剤、あるんで…」

ポケットを探ると丁度解熱剤があったので、持たせたお母さんに感謝した。てか、ポケットに入れてた私もナイス。

……彼にまだ試合があるかもわからないので、私は本来行くべきの救護所には行かなかった。

私が薬のために年齢を訊くと、彼がぷっ、と口に手を当てて笑った。

「な、何ですか。」

「いや…。年齢訊くのって、合コンみたいだなんて」

「……悪いですかっ」

「ううん、ごめん。ついでに、14歳」

じ、じゃあ半分…。

彼に解熱剤を渡すと、彼は素直にミネラルウォーターでそれを飲んだ。その時、無意識のうちに彼が羽織る上着に縫ってある名字を目で追っていて、私は自分に驚いた。

「あ…悪いけど、名前は？」

「…榎崎、桜です」

「榎崎さんか。ありがとう」

そして彼は名前を訊くほうが合コンみたいだな、と自虐していた。

「助かったよ、榎崎さん」

「いえ。」

彼が立ち上がった時、はっきりと見えた”藤野”という刺繍。私は、何故かまじまじとそれを見ていた。

それに気が付かない彼は、こっそりと囁くように言った。

「…熱出したこと、秘密にしておいてくれる？」

今更思えば、彼はすごく端正な顔立ちをしていて、ドキドキしてしまう。

「も、勿論。」

「うん。…じゃあね」

そう言っつて、彼は会場のほうに戻っていった。私は少しだけ、彼のその背中を見送った。

それからというもの、時々自然にあの日のことを思い出している。覚えてるのは変だし、忘れようと思うのに、なかなか記憶から抜けない。

あの日から時が過ぎる中で、異性から告白されたことは少しだけあった。

自分でもわからないけれど、何故かその度に彼を思い出して変な気持ちになる。胸がさわさわするような、苦しいような…本当に変な気持ち。

そんな気持ちに影響されたからか、気が付けばいつも告白の返事は決まっつていて、「ごめんなさい」だった。

告白を断ると、そのあとに聞きつけた友達がどうしてと私に訊いてきたけれど、自分でもよくわからないから答えを誤魔化していた。私は何故か、変な気持ちになるということを訊かれたときに言えなかった。

自分から言うこともできなかったので、この気持ちは何なのかわからないまま、今に至った。

どうか、この気持ちの正体がわかる日が来ますように…。

03 あの夏の日（後書き）

とにかく夏講が始まる前に急がねば。です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2591v/>

世界中の何よりも、キミ。

2011年7月29日03時28分発行